竿の形

まだ残暑の厳しい時期とはいえ、夜はいくぶん過ごしやすい。鎮守の森で梟が鳴くのを聞きながら、霊夢は身支度を調えていた。

纏うのは巫女装束でなく、白の長襦袢一枚だ。髪も下ろしており、普段の気怠げな様子とは裏腹な、神秘的な雰囲気を漂わせている。湯浴みしたてで、身体はほんのり温かい。頬は赤らみ、紅梅色の唇は艶めいていた。

いつもなら眠っている時間だが、まだ寝るわけにはいかない。今夜は博麗神社の巫女が代々受け継いできた、大変重要な神事が行われるからだ。

「巫女殿。用意は整いましたかな?」

「ええ、大丈夫。入って」

障子がゆっくりと開かれる。氏子代表の老人だ。今夜は神主代理をしてもらっている。社務など一つも知らないが、この行事では巫女の案内さえできれば十分だ。問題はない。

「最後の仕上げを」

老人が恭しく取り出したのは、目隠しだ。着ける。視界が奪われる感覚に、今年もこの時期がやって来たのだと感じさせられる。

「よろしい。では参りましょうか」

老人の声は、今から儀式を行うとは思えないほど、俗でねっとりとしていた。肩に手を

回し、恋人のように抱き寄せてくる。役得といわんばかりだ。転んでしまっては大変ですからなと開き直る始末だ。霊夢は抗議しなかった。儀式のほうが重要だ。

「さあ巫女殿、着きましたぞ。神様を良く歓待なさいませよ……」

耳元で囁かれる。湿った吐息が耳朶にかかり、小さく身体を震わせた。

年に一度の祭礼の日だけ、博麗神社の本殿は開かれる。中から複数の人の気配を感じる。先に待機していた氏子衆だ。今夜は神の使い、竿男を演じてもらっている。

足を踏み入れた途端、十を超える視線が浴びせかけられた。名も顔も分からぬ男達の、欲の籠もった視線がだ。本能が戦慄する。だが同時に、腹の奥が熱くなりもした。

逃げ場を奪うように、背後で扉が閉ざされる。駄目押しの如く、外から閂がかけられた。他に出口はない。夜が明けて儀式が終わり、あの老人が閂を外すまで、どこにも行けない。

室内には、神事に使う香の匂いに混じり、嗅ぎ慣れない匂いが漂っていた。男の体臭だ。竿男は全裸で過ごす決まりになっている。だからだろう。

何人もの裸の男と、少女が一人。置かれた状況に、霊夢は唾を呑む。身体がこわばっている。大妖怪相手でも物怖じせぬ彼女が、緊張しているのだ。視界の一切を奪われているというのが、それを助長する。

けれども、すべきことを放り投げるわけにはいかない。受け継がれてきた次第に従い、

霊夢は己の襦袢に手をかけ、帯を解く。衣擦れの音とともに、珠の肌が男の前に晒された。

露わになったのは、守られる者と守る者の境に立つ、成熟しつつも育ちきらない肉体だ。二次性徴を終えて大人びてきている一方、未だ凹凸の少ないところもあり、あどけなさを残してもいる。全体的にしなやかな輪郭は、博麗の巫女として妖怪をしばき倒している姿からすると意外なほどだ。性的魅力では大人に及ばないが、いるだけで場が華やぐような可愛らしさを備えている。そのようなものが欲の籠もった視線に晒されているのだから、背徳的だった。透き通るような肌は、室内灯の色をうけて橙に染まっている。

首はほっそりとしており、喉は白い。肩もなだらかで、見る者に華奢な印象を与える。かつて平坦だった胸は、多少成長して、乳房と呼べる程度の膨らみを獲得していた。揉みしだけるほどかといえば否だが、撫で回し弄ぶ愉しみは得られるだろう。鎖骨や腋窩から双丘にいたるラインは、この年頃にだけ醸し出される独特の愛くるしさを備えている。

乳輪は小さめで、乙女に特有の、淡い色合いをしている。はっきり輪郭があるわけではなく、肌の色からグラデーションをなすように、じわじわ濃くなっていくタイプだった。乳首は控えめで、ぽっちりと小さくたたずんでいた。

数年前まで寸胴だった腹回りは、二次性徴を迎えて以来、きゅっとくびれていた。腰囲の数字はそれなりにあるはずだが、強く抱きしめれば折れてしまいそうな緊張感を与える。

どこか儚い印象の拠り所だ。中央で縦に窪んだ臍が、全体のシルエットを引き締めていた。

さらに視点を下げれば、骨盤にいきつく。子を産み育む用意を整え、柔らかく広がっている。子宮に種を植え付け孕ませたいという凶暴な欲を、見る者に抱かせてやまない。

陰毛は、初潮以来順調に生え揃いつつあるが、全体としては淡い。大人と断言するにはまだまだ未熟だが、今後の成長を感じさせる。

そして、何より目を惹くのが、ヴァギナだ。可愛げな肉体において、そこは明確に色香を漂わせていた。ゆるやかに花開いた様は、彼女が経験済みであることを——経験豊富であることを物語っている。あどけなさと裏腹に大人びた裂け目の端では、陰核が控えめに自己主張していた。

背後に回れば、しゃぶりつきたくなるようなうなじが目に飛び込む。視線を下げ、白い背中に脊柱の窪みと追っていけば、やがて尻に辿り着く。肉付きは未だ薄いが、形がよい。きゅっと引き締まって、上向いている。今のうちから快楽を教え込んで、自分専用にしてやりたい——そんな下衆な欲望を覚えさせるヒップだ。

歩くより飛ぶ時間の方が長いわりに、脚はしなやかで美しい。線の細さが不健康な印象に繋がらないのは、ひとえにこの脚のおかげだろう。

見られている。質量を感じるほどねっとりとした視線が自らの裸体に注がれているのを、

霊夢ははっきりと感じていた。込められた感情は極めてシンプルだ。つまり、性欲。少女である彼女は、当然不安を覚える。だが同時に、腹の奥はじゅわりと蜜を帯びつつあった。

「では、博麗の巫女よ。清めの水を」

「ええ」

低く渋い声が、こちらへ投げかけられる。渡されたのは大盃だ。わりと重いのは、清めの水と称された液体が、なみなみと注がれているからだ。

縁に口をつけ、若干とろりとした液体を、小さく喉を鳴らながら嚥下していく。途端、かぁっ、と身体が熱くなる。うっすらと汗がにじんでくる。控えめだった乳首が硬く尖り、自己主張を始める。股が、じゅんと潤う。少女の肉体は、明らかに発情し始めていた。

清めの水とは、この行事においてのみ使われる、秘伝の酒で薬だ。効能は、今の霊夢の様子を見れば明らかだろう。

「飲まれましたか？　では、今年も始めるとしましょう。婚姻の儀を」

先の男が、もう一度声をかけてくる。それを合図に、彼女をぐるりと取り囲むように、氏子らの気配が動いた。逃がしはしないと言われているかのようだった。

婚姻の儀というのが、年中行事の正体だ。里の男性から選ばれた神の使い――竿男が、巫女と結ばれる。これは柔らかい言い回しで、するのは性交だ。竿男は複数選ばれるので、

巫女を氏子で輪姦すことになる。巫女自ら身体を捧げ、あまねく神からむこう一年の加護を得つつ、氏子衆との関係を維持するという理屈だった。

倫理観を脇に置いてもおかしな話だ。博麗神社は祭神をもたないのだから、神の使いも何もない。それで貞操を辱められるのだから、巫女からすればたまったものではない。

しかし、歴代の巫女らが抗議することはなかった。彼女もまた、男の都合の良い妄想のごときこの祭りを、拒んではいない。巫女に就任して以来、名も顔も年も分からぬ誰かの精を、毎年受けとめているのだった。人里では、博麗霊夢の裸体や具合を知らぬ男の方が少ないという有様だった。

竿男どもが立ち上がる。反対に、彼女は床に座り込む。室内に漂う男の匂いが増した。出所に顔が近づいたのだから当然だ。つまり、先ほどから感じていた匂いとは、股間から漂うペニスの臭気に他ならなかった。

鼻腔がひくひく蠢く。嗅ぐほどに、己の中の理性がとろとろと蕩けていくように感じる。毎年一度は味わっている感覚に、また婚姻の儀が始まるのだと実感させられる。

「はッ……は」

心なしか、呼吸が浅くなっていた。自らの心音が、鼓膜の裏側から聞こえてくるようだ。

不意に、ぺちりと音がした。何か硬く熱いものが、軽く頬を叩いたのだ。手ではない、

ほんのりじっとりと湿ったものが。正体が分からぬ霊夢ではない。竿だ。強まる臭気に、胸がきゅうと疼く。

少女の頬に陰茎を押しつける。嫌がらせじみた行為だが、悪いのは霊夢だ。一年越しの男根に蕩けてしまって、神事の次第を忘れかけていたのだから。巫女にあるまじき失態を内心で恥じながら、彼女は手順通りに、床に膝をつき、手をつき、額をつけた。

「神様……、今年もまた、婚姻の時期がやって参りました。この一年私が、そして氏子の皆が健やかに過ごせたのも、みな神様のお陰です。良く過ごせた一年に御礼申し上げるとともに、今後も見守ってくださいますよう、祈りを込め巫女の胎を捧げます。どうぞ私に、神様の種をつけて、私を貴方様の嫁にしてくださいませ」

恭しくも大胆な言葉で、性交をねだる。無茶苦茶だが、これがこの行事の作法なのだ。普段の霊夢は、こういったものをバカバカしいと切って捨てるタイプだ。しかし今だけは、心から述べていた。一つ言葉を紡ぐたび、先ほど口にした清めの水が、過去の婚姻の儀の記憶が、腹の奥をきゅんきゅんと切なくさせるのだ。

「よろしい、では、誓いの接吻を」

厳かなる声で、竿男が告げる。神事らしく体裁を取り繕おうとしているらしい。しかし声色には、嘲りと性欲があらわれていた。視界が奪われているぶん、はっきりと分かった。

顔をあげる。接吻せよと言われたが、彼らは神の使いだ。直接キスするなど、畏れ多い。ではどこに口づけるのか？　答えは一つだった。

気配から、眼前に竿が突き出されていると察する。手を伸ばしソレに触れる。ぐにぐにとした、鉄芯にゴムを巻いたような感触で、おそろしいほどに熱い。尽くさなくてはと、本能が命じてくる。

「はッ……あ、……ちゅッ」

ゆっくり顔を近づけていく。若々しいぷるりとした唇で、名も顔も分からぬ男の性器にキスをする。触れた瞬間、空気が小さな音をたてた。

おお、と、周囲の竿男達から感嘆の吐息が零れる。見られているのだと、今さらながら羞恥が沸き起こる。けれども、やめようとは思わなかった。むしろ、もっと見て欲しいと、心のどこかで考えすらしていた。

「は、むッ、……ん、むッ、んぅ……っ」

亀頭を、竿を、唇で包むように呑み込んでいく。穢れなき巫女のリップが、男の欲望を満たすためだけに使われる。

口内に、濃い男の味が広がる。視覚が機能していないぶん、はっきり感じられた。

一年越しの、特有の風味だ。決して快いものではないはずだが、しかし霊夢は目隠しの

奥の瞳を蕩かすのだった。

「ちゅぅッ、ぢゅるッ、んっ、ふッ、くぷ、んぅッ、ふ、んぅう」

肉竿を吸いあげながら、ゆっくりと頭を前後させていく。ちゅぷッ、ちゅぽっと、口端から空気の抜ける湿っぽい音が響く。

「おっ、ぉ、ぉぅッ……ぉお」

上の方から、小さなうめき声が降りかかってくる。羞恥ゆえ奉仕はぎこちなかったが、そのぎこちなさが彼をかえって感じさせているようだった。

「チュルッ、ンッ、くぷ、ふぅ、んっ、れる、ちゅぅ、くぅっ、ん」

肉竿を舐め回す。れろ、れろとカリ首や茎部に舌先を這わせるたび、痺れるような苦みが脳味噌に伝わってくる。鼻から吸った空気は、口内の肉竿に触れることで陰茎臭を纏い、肺に染みついていく。身体の中から、ペニスで犯されているようだ。下半身が熱く、太腿を擦り合わせる。

「んぅッ、くちゅッ、れるぅッ、はむっ、ちゅッ、ぢゅるッ、くふッ、くぷぅッ」

気がつけば、夢中でしゃぶりついていた。見られていることも忘れて、というわけではない。周囲から向けられる濃密な視線は、視界がなくとも感じられるほどで、意識の外に置こうとして置けるものではなかった。むしろ、見られていると意識しているからこそ、

行為はいっそう熱心なものになっていた。

「巫女よ、一人に尽くすばかりではいけません。皆等しく竿男なのですから、貴方はその全てを悦ばせる義務があります」

右手をとられる。どこへ導かれるかなど、決まっている。ペニスだ。口で奉仕しているのとは別のモノに、彼女のほっそりした指が触れる。

「んッ……！」

灼けた鉄に直接触れたかのような熱に、思わず手を引っ込めかける。だが、すぐに気を取り直し、脈動する肉の棒に指を絡めた。

「くぅうん……」

喉の奥から溜息が溢れる。指は人体においても特に神経の集中した、大変敏感な部位だ。そんなところで雄の象徴に触れたのだから、逞しさを思い知らずにいられない。熱が魔羅から伝わってくる。その熱は腕を経由して心臓、子宮まで伝わり、自分を絡め取っているように感じられた。尽くせと、清めの水で疼く子宮が命じてくる。逆らう霊夢ではない。

ゆっくりと扱き始める。ただ腕を前後させるだけではない。亀頭を指先で撫で回しつつ、手首のスナップをきかせ、緩急をつける。素人娘にはありえない、娼婦の技巧だ。勿論、はじめからこのような技術を知っていたわけではない。ただ雄に傅かんとする女の本能が、

正しい作法を彼女に教えているのだった。
作法に従い、奉仕にいっそう熱を入れる。左手も、顔も知れぬ男の魔羅に尽くしていく。陰茎の形を、指先で感じ取る。左手のモノは太くて真っ直ぐで、激しいピストンに向いていそうだ。右手のモノは反りが強く、しゃくるように腰を突き出されでもしたら、一瞬で蕩かされてしまいそうだった。
「んちゅッ、くぷッ、んぅッ、ンッ、ふぅッ、んぅう……くふぅう」
「はぁッ、はぁッ、はぁッ――はぁッ」
視界がないぶん、周囲の音や息づかいがはっきり感じられる。己がぺちゃぺちゃ陰茎を舐める音、濡れた艶声。竿男の荒い呼吸。全てが霊夢の官能を刺激し、腹の奥をぞくぞく震わせていた。
いつの間にか、汗をかいていた。深夜なのもあって、室内はそれほど暑くない。彼女の内から湧き上がってくる熱によるものなのは、明らかだった。
「ふぅっ……ンッ、じゅるッ、ちゅぅうッ、れろ、くぷ、かぽっ、んくぅ」
手淫をしながらも、口腔奉仕をしっかりと続けていた。頬を窄めるように、乳飲み子のようにペニスを吸い上げる。頭を前後させるたび、ちゅぽッ、くぽと、卑猥な水音が響く。口端から唾液がこぼれて顎まで伝っている。口内で、舌腹が尿道口をつつく。舌先は根元

まで這わされ、幹全体をれろれろと舐め回していた。
「ぉッ、ぉおゥ、ぉお――はぁッ、はぁッ」
例年、竿男は両手に余る人数が集められる。気配の数からするに、今年も同じくらいは居るようだ。つまり、口と両手をフル活用したところで、全く足りない。では、あぶれた男達はどうするか。しゅっ、しゅっと、断続的に聞こえる音が答えだ。穢れなき巫女の、娼婦のごとき様を肴に、己の魔羅を己自身で扱き立てているのだ。
何人かは、彼女の柔肌に竿を擦りつけている。先ほどから頭皮が引っ張られているのは、多分髪の毛で扱いている奴がいるからだろう。毎年一人二人、そういう嗜好の奴がいる。ともあれ、いっそう濃厚になる肉竿の匂いに、霊夢はくらくらとしていた。
ところで、今しているのは厳密にいうと神事ではない。博麗神社の婚姻の儀とは、神の使いたる竿男らと巫女が性交することだ。その定義でいくと前戯は儀式でないことになる。
とはいえ、巫女が神に嫁入りする一大事だ。間違いがあっては困るので、準備は入念に行われるべきだ。つまり、男の竿を昂ぶらせるだけでなく、巫女の身体もほぐす必要がある。
「ンッ、くッ、んぅうッ、ふ！　うンッ、くッ、んぅうッ」
そんな理屈で、彼らは霊夢の身体を弄んでいく。ほんのり膨らんだ乳房を、手垢を擦り込むように揉みしだかれる。左右の乳首をきゅっ、きゅっと摘まれ、優しくつねられる

たび、誰なのかすらも分からない男を好きになってしまいそうになる。
腋窩にヌルついたものが這い、ぺちゃぺちゃと音が鳴る。舐め回されている。性行為をするのとはまた異なる羞恥に、頬が赤らむ。背中に無数のキスの雨が降らされ、白い肌へ愛の痕が刻まれていく。
「くぅン、んぅッ、んっ、くふぅうんッ……」
青年か中年か老人かさえ分からない相手の二本指が、秘貝の入り口をしつこくなぞる。ご馳走を前にした犬のような鳴き声が、霊夢の白い喉からあがる。くちゅっ、くちゅっという音に合わせるように、柳腰が前後している。時折指の腹で淫豆を刺激されるたびに、びりびり響くような快感が身体を走り抜けた。
尻肉は手垢がつきそうなほど揉みしだかれ、足裏に肉竿らしき硬いモノが押し当てられ、擦りつけられている。もっと、もっとと求めるように、彼女のほうから押しつけていた。
まさに、全身を弄ばれている。三六〇度からもたらされる快楽に恍惚を覚えながらも、彼女は一生懸命、神の使いへ奉仕する。神事だからという建前と、本能の求めに従って。献身的な性技の前に、男達が限界を迎えるのは早かった。
「あぁ……出ますよ、清めの種が。しっかり受け止めなさい……ッ！」
上から声が降ってくる。夢心地だった霊夢だが、指示にはきちんと従う。竿男には服従

することと、何度も年中行事に参加してきたことで擦り込まれていた。
「んッ……――ぷはぁッ、は……はい、どうぞ、お射精をくださいませ……」
陰茎から口を離し、顔を上げる。大きく口を開き、手を添えるおまけ付きだ。
にぢにぢにぢと、音が聞こえてくる。竿にたっぷりと付着した唾液が、彼にこねられることであがる音に違いなかった。
「ぅ、ぉッ、ぉおッ、おおおおおおッ――！」
男の低いうめき声とともに、びゅぢゅ、ぶぢゅっと、独特の音が聞こえた。一瞬遅れて、熱いものが顔面にふりかかってくる。ペニスと比べてもいっそう濃厚な雄の臭いを放つ、熱く粘っこい濁液が。
「アッ、あぁっ、あぁああんッ……」
それはべちゃべちゃと、彼女の目隠し、鼻筋、頬、唇、舌へ次々にぶちまけられていく。汚らしい汁をぶちまけられているというのに、彼女が漏らすのは官能の溜息だ。身体の奥がぞくぞくと震え、腹の奥から蜜が溢れるのが分かった。
「ぉおッ、こっちも出るッ」
「こっちもだッ、おい、こっちを向けッ……！」
一人目が射精し、穢れなき巫女の顔面が白濁まみれになったのを皮切りに、竿男達は次

から次へ彼女に欲望をぶちまける。可憐な顔が、艶めく唇が、紅梅色の舌が、なにもかも白く汚されていく。それだけではない。濡羽色の髪や、少女らしい肉体まで、彼らは容赦なくスペルマまみれにしていく。

「はぁッ、あぁんッ、あぁ――ああ、これ、すきぃ……ッ」

己の可愛らしさを台無しにされているというのに、霊夢は避けもしなければ、嫌がりもしなかった。当然だ。今かけられているのは、神の使いからもたらされた清めの子種だ。巫女である己が、神からの授かり物を避けるなど、畏れ多くてできるはずもない。

なにより、マグマのように熱い種汁をべちゃべちゃかけられるたび、言い表せぬ安心と恍惚が全身を満たすのだ。まるで、疲れ切った日に熱い風呂に浸かったときのようだった。嫌がる道理など、どこにあるというのか？

「ぉお、射精した、射精した」

「はは、随分汚れましたね、巫女よ」

「ふぁい……ありがとう、ございます」

やがて、男達が射精を終える。視界ゼロの状況では、自分がどうなっているのかすらも分からない。少なくとも、酷い有様なのだろうことは容易に想像がついた。身じろぎするたび、ねちゃ、と小さく音がする。それはつまり、全身くまなく精液まみれということだ。

「はぁんッ――」

霊夢は恍惚のまま、己の身体に手を這わせていく。ぬちゃっ、ぬちゃっと音をたてて、自らの肌に纏わり付く種を塗り広げていく。ぬぐっているのではない。擦り込んでいる。

この身体のうち白く汚れて――いや、清められていないところがなくなるよう、足指の隙間にいたるまで、丁寧に。額にこめかみに鼻筋に頬、人中におとがいに首・肩・鎖骨。二の腕上腕手に指、腋に乳房に腹に臍、下腹にうなじに背中に尻に脚。文字通り全身に、種が擦り込まれていく。そうするたび、神様に種を植え付けていただくにふさわしい様になっていくのを、はっきりと感じていた。

「んあぁッ、あッ、はぁッ、あっ……アッ……！」

ことの途中、霊夢はしきりに、ぞくぞくと震えていた。神に相応しく清められる己に、精神的なアクメを迎えているのだった。

やがて、退廃的な行為も終わる。乾ききった精液が全身から異臭を漂わせるが、本人はそれほど感じていない。鼻はとっくの昔にバカになっていた。男達も、まだまだ萎えてはいない。それは、なおも周囲からぎらついた視線を向けられていることからも明らかだ。

「さあ巫女よ、とうとう婚姻の時がやってきました。こちらへ」

手を引かれ、部屋の中央へ導かれる。

博麗神社の本殿には、祭壇も御神体もない。祭神がいないからだ。代わりに、今日このときのために、布団が敷かれていた。孕み場と呼ばれている。神の使いと巫女が交わり、子を成すための空間、セックスのための場所だ。

羽毛布団の柔らかい感触を足裏に感じ、今年もとうとうこの時期が来たのだと感じる。名も顔も知らぬ男に貫かれ、お嫁さんにしてもらう時期が。すっかり準備を整えた子宮はしきりに疼いて、陰唇からはとろとろと愛の蜜が溢れだしてやまなかった。

「……おやおや、これでは身体中の水分が失われてしまう。清めの水をもっと飲みなさい、巫女よ。ことの最中に脱水症状でも起こしたら、儀式どころではなくなりますからね」

「わかりまし……た?」

盃を渡されたので、言われるがまま飲み干そうとする。口を付けたとたん、想像と全く異なる味に、思わず戻しそうになる。

清めの水とは、有り体にいって薬入りの酒だ。だがこれは、明らかに酒でも薬でもない。舌を刺すようなえぐみに、強烈な臭み。フェラチオによって味覚が馬鹿になっている今の霊夢でも分かる。間違いなく、精液だった。

「どうかしましたか? ただの清めの水ですよ? 見えていないとはいえ、何を心配することがありますか。さあ、飲みなさい」

あっけにとられていると、竿男が声をかけてくる。口調は有無を言わさないものだった。目が見えない状態なのをいいことに、騙そうというのだ。

――ああ、しかし、けれども、彼の言うとおりかもしれない。目隠ししているから味が分からなくなっているだけで、もしかしたら本当に、清めの水かもしれないじゃないか。無闇に人を疑うのはよくない。まして、今の彼らはただの氏子ではない。神の使い、竿男なのだ。巫女が神様を信じずして、一体何を信じるというのだ?

「んッ……く、ッ、ん、ぐッ、んくふぅッ……」

杯を傾け、霊夢は清めの水と思われるそれを、ゆっくりと時間をかけて嚥下していく。先ほどの口淫劇の間に用意したのだろうか、作りたてと思われる汁は、餅のように濃厚だ。食道にどろどろとへばりついて、なかなか降りていかない。それでも、一口一口、口中で転がすようにしながら、ゆっくり飲み干していく。

「れろッ、ンッ、ふ……」

杯に舌を這わせ、残った僅かな汁まで舐め取っていく。品がないが、こんなに美味しい清めの水は、しっかり味わわないともったいない。

ようやく全てを飲み終える。けぷぅと、喉が小さく鳴った。吐息が精液臭かった。

胃袋がずっしり重い。やはりあれは、酒などではなかったのだろう。けれども、清めと

してはこれ以上なく最適であるように思えた。
身体の内外から、欲望でもって清めていただいた。あとは、種をつけていただくだけだ。
「これで清めも済んだ。あとは交わるだけです。さあ、私の穴嫁にしてあげましょう」
「あぁッ……」
穴嫁。なんて卑猥で、いやらしい響きなのだろうか。人を人とも思わないような言葉に、彼女は顔を蕩かせた。
「さあ、跨がりなさい。せっかく巫女が胎を捧げるのです、溢れるほど種を植えつけて、一発で子を宿させてあげましょう。十月と十日の後、この可愛らしい腹が膨れている様を見るのが楽しみですよ」
下から声をかけられ、霊夢はその場に腰を下ろす。仰向けで寝転んだ竿男に跨がる形だ。婚姻の儀においては、騎乗位での交わりが好まれる。巫女とは神に仕えるものだ。巫女が種をいただくためにその身を捧げるわけだから、奉仕する体位たる騎乗位が選ばれるのは、当然だった。
「失礼致します」
手探りしながら、自らの股座の下でいきりたつ魔羅を指先で摘まむ。ずれないよう導き、己の膣口に押し当てる。

「あんっ……」

ちゅっ、と、接吻するような音がした。小さな声が漏れる。避妊具など一切かぶせない生のペニスは、すこし触れただけで蕩けてしまいそうな官能を霊夢にもたらす。このまま腰を下ろしたら、一体どうなってしまうことだろう――その想像は、博麗霊夢をして軽い戦慄を覚えさせる。けれども戦慄よりも、期待の方がはるかに大きかった。ゆえに彼女は、そのまま真っ直ぐ、己の腰を下ろした。

「あッ――はぁあああああああんッ！」

狭穴をかき分けて、肉竿が体内に入り込んでくる。カリ首がぞりぞりと膣襞をめくり、脳の裏にびりびり響く刺激を叩きつけてくる。まして今は、清めの水の薬効やこれまでの性行為で、性欲が高まりに高まった状態だ。駆け抜ける性感は甚だしく、本殿の外にまで聞こえそうな、高い声が響いた。

挿入っちゃった。

相変わらず見えはしないが、神に膣を捧げたことを強く自覚する。膣細胞の一つ一つが、一年ぶりの太魔羅に、悦んでいるのだ。視界がない分、竿をぐねぐねと這い回る血管の形まで、しっかり感じ取れるほどだった。

「おぉ……相変わらずとろとろと良く絡みつく、いやらしい穴だ。これでは、あっという

間に出てしまいそうだ。まったく、巫女ともあろう者が、大した淫乱ですね？」
「あッ、は、あぁ……ッ、神様、どうか私のおまんこを、心ゆくまでご堪能くださいッ、アッ、ハッ、あッ、あぁんッ！」
普段の霊夢しか知らぬ者が聞けば仰天するような、色に濡れきった声だった。そのまま彼女は、腰をくねらせ始める。くちゃッ、ぐちゃと、濡れた肉をこねくり回す音が室内に響く。孕み場と呼ばれる布団の上で、少女の腰が卑猥に踊る。膣穴が肉竿をしゃぶって、きゅうきゅうと締め付けて絡みつくことで悦ばせている。結合部からは、ぴっ、ぴっと、濃い愛の蜜がしとどに散っていた。
「はぁんッ、あはぁッ、あんッ、あぁッ、いいよぉ、これ、っ、すきぃッ……！」
腰を下ろす。ぷちゅっと、愛の蜜がねとついた音をたてる。腰を上げる。ぞる、ぞると、カリ首が膣壁を擦り上げては、目の裏がちかちかする快感を与えてくる。これだ。これをずっと待ち望んでいたのだ。一年越しの快感に、霊夢は既に夢中だった。
婚姻の儀があるので、博麗の巫女は年に一度は性交することになる。一方で、神に傅く身で只人と寝るなど言語道断という理屈で、儀式以外で性交渉の権利は認められていない。婚姻の儀で快楽に堕した巫女は、次の儀式が訪れるまで、燃え上がる肉欲を抱えて過ごすこととなる。かつての巫女もそうだったし、霊夢もそうだ。

「あはぁッ、あぁッ！　あんッ、はぁッ、あッ、くはぁ、ひぃいんっ！」

昨年の儀式から三六五日、どれほどこの快楽を待ち焦がれたことか。はしたないほどの嬌声を垂れ流しにしながら、最愛のモノに貫いていただく悦びと感動に、霊夢は震える。狂った儀式に歴代の巫女が異議一つ唱えなかった理由が、彼女にはよく分かる。こんなにきもちいいのに、どうして拒む必要がある？　どうして異論なんて唱えて、折角のきもちよくなれるチャンスをドブに捨てたりするだろう？　そんなのは、バカのすることだ。

「あはぁッ、もっとッ、あぁッ、あんっ、くはぁッ、ンッ、ア！」

艶声を零しながら、霊夢は柳腰を前後左右にくねらせる。体が動くたび、浮かんだ珠のような汗が散り、ほんのりと膨らむ乳房がふるふると震える。その様は色町の娼婦よりもずっと淫らだった。

毎年の輪姦により躾けられた本能が、神に、ペニスによく尽くせと彼女に命じている。もちろん、従う。よく尽くすというのは、今女穴を捧げている竿に、ということだけではない。この場にいる竿男は、みな神の使いなのだから、等しく、奉仕する必要がある。

「えぁッ――がぼッ！」

どうぞお使いくださいと、大きく口を開き舌を突き出す。それだけで、彼らには伝わる。目の前に男の気配を感じると同時に、頭を掴まれ、ぐいと引き寄せられた。

肉棒が口腔深くまで入り込む。えらく立派で、口腔一杯を使ってなお足りない。亀頭は喉にまで侵入し、粘膜をごりっと抉った。

「んぐぅうううッ……！」

くぐもった叫び声があがる。本来ならよく噛まれペースト状になったものだけが流れるところに、完全に固形のものが入ってきたのだ。苦痛を覚えて当然だ。しかし彼女が一番感じていたのは、痛みではなく、恍惚だった。肉竿に奉仕できる悦びに、震えていたのだ。そのことを示すように、きゅぅっとヴァギナが締まった。

「ぐッ……ご！　がぼッ、ぐぶぅッ、んぐッ、んぅううッ！」

そのまま、抽送が始まる。つまり、がっしり抱えて固定した霊夢の頭、顔面にめがけて、男が腰を叩きつけてきたのだ。口内をペニスが蹂躙し、喉粘膜をごりごりと抉る。顔面に下腹が何度も打ち付けられる。

「んふぅうッ、ごッ、ぐゥ……ッ、がぼッ、がぽッ、んぢゅぅッ、ふぐぅうッ」

激しいイラマチオだ。とても少女に対する扱いではなかった。それでも霊夢は拒まない。むしろ、突き込まれる肉竿をよりよく悦ばせんと、舌を絡ませ、ちゅうちゅう吸い付く。ぶぽッ、ぐぽっと、口端から空気の抜ける間抜けな音が響いていた。

少女一人を上下から貫いておいてなお、男達は容赦も満足もしない。彼女の手をとり、

陰茎を握らせる。求められたのは手淫だ。行為自体は先ほどもしたが、今度は状況が違う。ねじ込まれる二本のペニスに、目を白黒させているのだから。それどころではなかった。

それでも霊夢は、己の手に触れたものが何なのかを理解するなり、指を絡ませ、手首をしならせて、肉竿を扱きたて始める。半ば無意識の行動だった。性の快楽を求める心が、自然とそのようにさせているのだ。

「ぐぷッ、ぐッ、んぐッ、んごッ、ふぐぅッ、んぐぅうッ、ごッ！」

ごぼ、ごぼっと、排水口に水が流れるような音をたてながら、口腔をペニスに捧げる。両手はそれぞれ竿を握り込んで、先のように男達に全身を愛撫されている。それだけしてなお、腰をくねらせるのは忘れていない。いやむしろ、先ほどよりもさらに熱心になっているほどだった。

「んくふぅぅうッ、ぐッ、ぉぐぅッ、んぐッ、ごムッ、んぐぅう！」

猿のように腰を振り立て、ぶぢゅっ、ぷちゅっと、結合部から卑猥な音をあげる。ぷし、ぷしッと散る愛蜜で、敷かれた布団はぐしょぐしょになっている。

「んッ！　んぅぅうッ！」

男に下から突き上げられると、狂ったように悦んでみせる。よく奉仕しているご褒美といわんばかりに尻肉に平手を入れられると、がくがくと身体を震わせてみせた。

虐待、いや、もはや暴虐といっていいほどの行為だった。だが、これこそ霊夢の望んでいたものだ。婚姻の儀以外で男と寝るべからずという掟を破ったとしても、他の手段では決して、このような激しい輪姦の悦びは得られまい。だからこそ、まる一年の禁欲生活を選んででも、この日をずっと待っていたのだった。

歴代の巫女だって、そうに違いなかった。

「ぉおッ――なんて締まりだ、ああ、出る……！」

「んふぅうッ、ぢゅるッ、れろッ、れるッ、んぐぅう……！」

そんな交わりも、終わりが近いことを霊夢は感じていた。男達の腰使いが速く、激しくなり、息づかいが荒くなっている。向けられる視線はぎらぎらとした、目の前の女に種を植えることしか考えていないものになっていた。精液を浴びせられているようだと、錯覚しそうになるほど濃厚な目だ。

霊夢もまた、吐き出されんとしている種を受け入れようとしていた。柳腰を蛸のようにくねらせ、喉を締め、指を絡ませる。

全員がアクメへまっしぐらに向かっているのだ。快楽の頂点に至るのに、さほど時間はかからなかった。

「ぉおッ、出る出る出る出るッ――ぉおおお！」

最初に達したのは、両脇で手淫を受けていた男達だ。肉竿が膨らむのと同時に、彼らは己の銃口を霊夢の身体へ向ける。どこかあどけなさを残す少女の肉体へ、容赦なく白濁をぶちまけていく。どろりとした白濁で清められていくたび、己の奉仕が男達を悦ばせたという事実を、誇らしく感じる。

「くぅうッ、こっちもだ、零すなよ……ッ、おおおおッ！」

さらに、口腔のものが射精する。霊夢の頭を引き寄せ、反対に下腹を突き出す。当然、竿は今まで以上に彼女の深くに入り込む。鼻先が陰毛に埋もれ、濃厚な汗の匂いに意識がグラつく。同時に、肉竿が弾けた。どぼ、どぼぼと、白濁が注ぎ込まれていく。口でなく、食道や胃へ直接。己の消化器官を精液の吐き捨て場にしていただいていることに、彼女はたまらない悦びを覚える。喉粘膜をきゅうきゅうと締め付け、竿に吸い付く様は、とても嬲り者にされている最中の女の態度とは思えないものだった。舌を口外にまで伸ばして、今まさに収縮して子種を送り出している陰嚢を、れろれろと舐め回しまでしてみせた。

「素晴らしい！　さあ受け取りなさい巫女よ、膣内射精（なかだし）されて孕んで、私の嫁になれッ、……く、ぅうう！」

濃厚なスペルマの感触に、味に感動した子宮が疼き、膣肉がきゅんと締まる。それで、ヴァギナを貫いていたモノも限界に至った。

神のペニスが、一番奥に突き込まれる。子を成すための聖域、すなわち子宮を、亀頭がこつんと小突く。神に尽くす巫女として、いよいよ胎を捧げるときが来たのだ――期待にぞくりと震えると同時に、肉竿が炸裂した。

睾丸から輸精管、輸精管から尿道へと至ったスペルマが、尿道口より勢いよく放たれていく。無数の精子が子宮へ注がれては、鞭毛を激しく蠢かして、奥へ奥へと泳ぎ始める。博麗霊夢の卵子と結びつき、子を成させるために。

――わたし、孕んじゃった。

精子の運動が生む圧倒的な熱量に、彼女は己の肉畑に種が植え付けられたことを知る。巫女である霊夢が、神に授けられたものを避けられるはずもない。膣内射精を受けた以上、彼女の妊娠は確実だった

「ンッ――んぅうううううううううううッ！」

丸一年の望みが、三箇所同時射精という最高の形で叶った。当然、絶頂せずにいられるはずもない。身体をがくがくと痙攣させ、女として最上級の悦びに心を震わせる。全身を駆け巡った快楽信号が筋肉を滅茶苦茶に収縮させる。背筋は弓なりに反り、膨らみかけの乳房がふるんと震える。膣肉は己を孕ませてくださったモノをきゅうきゅうと抱きしめ、愛の蜜をぶしぃと噴き出す。視界は白く明滅していた。目隠しをしているにも関わらずだ。

強烈すぎる電気信号により、脳味噌の神経がスパークしているに違いなかった。
周囲でペニスを扱いていた男達が、彼女めがけて一斉に白濁をぶちまけていく。白濁が解き放たれては、肌にふりかけられる。巫女の婚姻を寿ぐライスシャワーのごとしだった。
「ぉおッ……出た、出た」
「んくぅッ――くゥ、む、ぷふゥ……はッ、はっ……はぁッ……」
長きに渡る絶頂の波も、ようやく退いていく。実際には十数秒もないくらいだったが、本人にとっては一生ほども長い時間に感じられた。
それほど強烈なエクスタシーを、まだ未熟さを残る肉体で受け止めたのだ。彼女が酷い有様になっていたのは、ある意味必然といえた。
口腔から竿が引き抜かれる。喉粘膜の残骸と白濁のミックスジュースが、亀頭から唇にかけて伝っている。膣穴からも竿が抜かれる。己に種を植えてくださったモノと別れたくないというように、襞は最後まで絡みつく。別れを惜しむように、ちゅぽん、と音がした。
「おやおや、夫の種を零してしまうとは。躾のなっていない妻だ」
「はッ、あッ、あぁんッ、あぁッ、ごめん、なさい、旦那様ぁ」
一瞬遅れ、収まりきらなかった子種がとろりと溢れる。彼女を貫いていた男は、それを押し戻すように、達したばかりの穴に指をねじ込んだ。そのまま敏感な膣肉を、お仕置き

といわんばかりにくちゃくちゃとこねくっていく。イッたばかりの襞を弄くり回されては、快楽の余韻に惚けていた彼女も意識を引き戻されずにはいられなかった。
「よろしい、巫女よ、これで一度目の婚姻は終わりです。よく頑張りましたね」
「あ……」
男の言葉を受け、霊夢は己がすべきことを、つまり儀式の次第を思い出す。彼の上から退き、ふたたび床に額を擦りつけた。
「神様、私に子種を授けてくださり、ありがとうございました。このあともどうか、私の身体で、心ゆくまでお楽しみくださいませ」
恭しく述べる。己の分際がわかっているようですねと、揶揄する声が投げかけられた。
「博麗神社は特定の祭神を持たない。それだけに、巫女は全ての神に等しく仕えなくてはなりません。……つまり私だけでなく、この場の竿男全員が金玉の中身を空にするまで、婚姻の儀は続くということ。喜びなさい博麗の巫女。今夜貴方は、何十という神に嫁入りするのです。穴嫁として、せいぜい夫達に奉仕し、娼婦のように子種をねだるのですよ」
「はい、どうぞ私を皆様の、共用の嫁にしてくださいませ……、あはぁッ……」
犯し抜いてやるぞと言われている。にもかかわらず、いや、だからこそ、霊夢の口は、笑みを形作る。輪姦の期待に目隠しの下の瞳が蕩けているのは、いうまでもなかった。